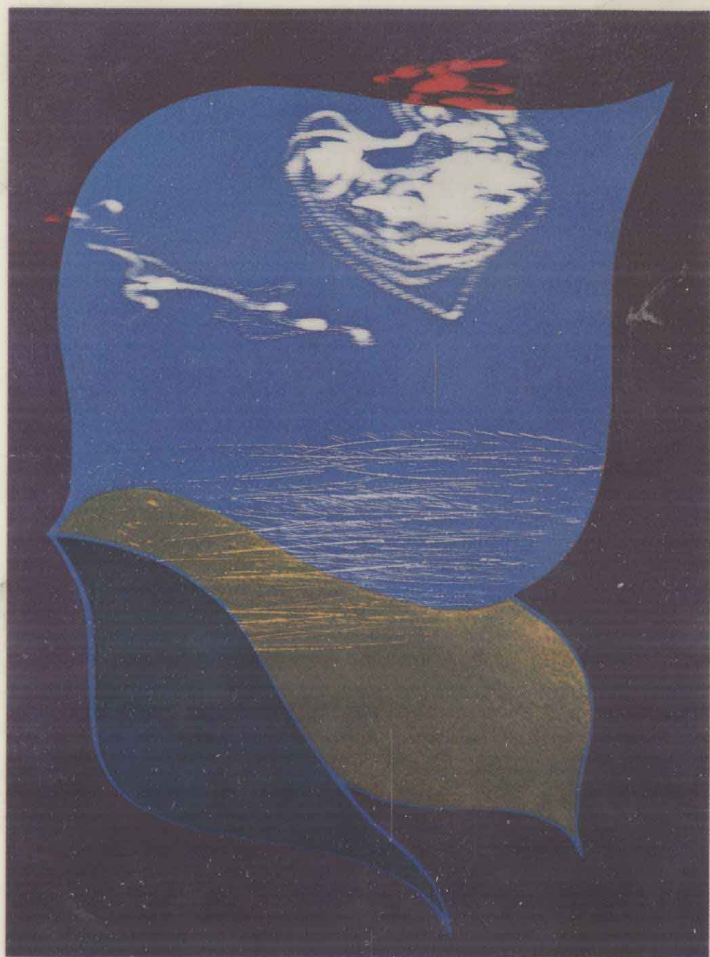


海を感じる時

中沢けい



を感じる時

中沢けい

講談社

海を感じる時

昭和五十三年六月二十日 第一刷発行
昭和五十九年八月十五日 第三十刷発行

著者——中沢けい

© Kei Nakazawa 1978, Printed in Japan



発行者——加藤勝久

発行所——株式会社講談社

東京都文京区音羽三—三—三 郵便番号二三 電話東京〇三—九四—二二 振替東京六—二二〇〇

印刷所——信毎書籍印刷株式会社 製本所——藤沢製本株式会社

定価——八五〇円

落丁本・乱丁本は小社書籍製作部宛にお送りください。

送料小社負担にてお取替えいたします。

(本篇中の「ロマンス」の歌詞は、阿久悠の作詞による。日本音楽著作権協会(出)許諾七八〇九四一九号)

ISBN4-06-113968-1(2) (文1)

装幀 斎藤寿一（「風の中の風景」より）
口絵写真撮影 久保誠

目次

海を感じる時

あとがき

海を感じる時

「海を見に行こう」

食事をすませ、しばらく煙草を吸ったままおし黙っていた洋が、突然提案した。

「え？」

「ここから、海岸まで歩いて、十分くらいなものだろ。俺、海が見たいんだ。生まれてからずっと海を見てくらしでね。海がなんとなく、俺のいちばん休まる場所なんだ。東京にいと、やけに恋しくなるし」

「あたし、城山に登ろうと思っていたのに」

「海だ」

「城山だって、T湾が見わたせるのよ」

「それじゃあ、感じないんだよ。近くで見なけりゃ、身体ごと海を感じなければ」

「……………」

昨年の夏、東京で二週間ばかり予備校に通ったことがあった。あの時、帰りの列車の中から、しばらくぶりに、垣間見た海の碧さに驚きに近い感動を覚えた。身体の芯のほうに、ぶるぶると震えたあの感じを、洋は知っているのだろうか。

ていねいに、吸いかけのセブンスターをもみけしてから、二人分の食事代を洋が支払う。習慣化してしまった今では、私もそれがあたりまえのような顔をして、洋の後に立っている。が、以前は、コーヒー代や食

事代の支払いを洋が持つことに抵抗を感じていた。それはまるで、食事や寢床のために身体を提供する女たちのように自分が感じられたからだ。逆に洋は、支払うことに義務を感じていた。「男だから」と彼はいう。「妊娠にしろ、その他のことにしろ女は不利だから」と彼はいう。

私はまだ高校生で、洋は社会人であり十分に給与をもらっていることや、いつの間にかできあがった雰囲気で、それは二人の習慣になってしまった。

私たちは人目につかない道を選んで、海岸に出た。九月も末になると、ほとんど人はいない。T湾がおだやかに褶曲し、大房岬たふしによって視界がとぎれ、胸のすくような色の空がひろがる。

大房岬のつけねのあたり、ひとときわ緑の色濃い部分に白い火の見が見えた。あの下あたりが私の家のはずだ。耳もとで、母がときどき和服を

仕立てる手を休めて「なんのために生きてるんだか……」とつぶやいている、あの声を聞いたような気がした。高野洋との関係が露見してから、母はそうつぶやく。

私が、洋と、いや男と肉体的な関係を持つことは、母の生命の意味までも失わせてしまうものなのだろうか。私には、母があれほど狂乱したほんとうの理由がわからなかった。母の気持ちかわからないのは、彼女が言うように私がみだらで、くだらない女だからなのだろうか。ほんとうのことを言うと、今はそれを考えるのも疲れ果ててしまっていた。

「俺たち、二年になるんだよなあ」

海辺はゴミの山になっている。捨てられたもの、打ち上げられたもの、かろうじて砂が美しさを保っている場所に腰をおろし、洋は目を細めて、セブンスターをふかす。

「俺ね、なんだかんだ言っても、女とつき合ってたっていえるのあんたしかいないよ」

さっきから、波が、空になったシャンプーのビンをころがしている。

ピンは波に引かれたと思うと、すぐにまた打ち上げられる。

「東京には、きれいな人がいるでしょう」

「いても、相手にならない」

「してくれないんじゃないの」

「その通り」

どこから来たのか、二、三人とつれだった子供たちが、足もとをぬらしながら、歩いていく私たちの姿を見つけて、なにかひそひそとしゃべっていたかと思うと、よくわからない言葉で、大きな声ではやしたてた。

「いいねえ、あんな頃さ。俺なんかも浜で東京からきたアベックを、やいやい、からかったよ」

こんな時は、やさしい目をきまってる。だから、私は洋を信じてしまふ。いたずら坊主の中には、水を含み砂まみれの運動グツを竹ざおにひっかけて、肩にかついでいるのもいた。帽子を横にかぶっているのもいる。丸い頭の向こうで海が、きらきら光る。

「子供、好きね」

「ああ、ちっちゃいのがね。俺、あんな連中ならすぐ友だちになれるよ」

洋はあおむけになって、目を閉じた。額で短い前髪がゆれてる。それをホッとした気持ちでながめた。もう少年とはいえない。二年の時間は洋を青年と呼ぶに、十分ふさわしいものになっていた。

「キスしたい」

寝ている洋の上に顔をつきだす。そう言っただけで胸がときどきしている。

「だめ」

洋の答えはわかっていた。

「だれも見えないよ」

「あんたを、そんな風に見たくないんだ。俺ね、あんたのこと少し前と変わった感じでみてるんだよ」

「……………」

「今は、あんたと俺と理解し合える。でもどうにもならないな。結婚もできないだろうし、してもうまいかない。わかりきってるよ」

今までよりも、少し大きな波がシャンプーの空ビンをさらっていつ

た。

「わかってるんだ」

洋のひとりが青くなって、海に溶けだすように、風によって沖へはこばれる。私の手、足、額、それに内臓、みんな青く染っていきそうだ。私はボンヤリと洋の髪をなせた。手に柑橘系の香りがするリキッドがつく。洋のにおいだった。

1

私の十六の秋は、不満と寂寥にみちていた。それが二年前の私だ。

その季節になるときまって、ひとつの思い出にとらわれる。音の記憶がほとんどない。ハミリを音声なしで見るように、私の頭の中に映像が

動きだす。雨が白や黄色の菊の上にふりそそいでいる。私は祖父母の家の縁先から、それらの花が水を含んで、首をたれる様を見ていた。秋も末の、冷々とした日であったのを、よく覚えていた。

私の背後の薄暗い室内で、母が祖父に何かを言われている。視線は庭先にありながら、心では祖父母と、その前に正座した母の姿を凝視していた。やがて、静かな気配が十二の年の私の背中へ近づく。ふりむくと母が立っていた。私の頭の中には、何ソの考えもなかった。ただ、母をみあげ、放心したように立っている異常な——一種の妖氣にたじろいだちようどその時、母に縁先から蹴落とされ、驚きと事態の思いがけなさにふるえる私の上に、

「父親おやじによくにた顔しているあんたを育てていくのよ、にくったらしいったらありゃしないんだから」と、半ば怒声に近い、きんきんした声と

共に、父の位牌が投げつけられた。

あれは、おそらく父の四十九日の出来事なのだろう。父と母が築き上げた財産が、なんのことわりもなく、祖母の甥が養子となったためトビに油揚げがさらわれるように、母から取り上げられた。その詳しい事情は、私は知らない。が、後妻であった祖母が、家族との血のつながりのない不安からか、ヒステリックに、母とその子である私をいじめたのは、よく覚えている。そのためか、私には年老いているものへの好感はない。

後に、母は涙を流しながら、

「あの時のお母さんのつらい気持ちを、子供のあんたに覚えておいて欲しかったから」

と、私の前であやまった。